

森吉山南麓、中ノ又溪谷に流れる「安の滝」。
紅葉の秋の景色は格別だ



を旅する

秋田県北秋田市阿仁地区。森吉山麓の里、阿仁に生まれた狩人は「マタギ」と呼ばれた。
2004年、直木賞と山本周五郎賞をダブル受賞して話題を呼んだ熊谷達也の小説『邂逅の森』は
大正時代の阿仁を舞台に、厳しい自然と向き合って生きるマタギの世界を克明に描き出した。

物語の底流には、山の神をあがめ、厳格な掟の下に狩りをする男たちや、
山里の人々の持つ独特な自然観があった。そして今、時代が移り変わってもなお、
阿仁の地には、自然と共に生きるマタギたちの知恵が息づいている。

取材協力 川口洋美（東北芸術工科大学歴史地理学専攻教授）
取材 文Ⅱ 高橋盛男（P.8、19） 西上原三子氏（P.24、27）
撮影Ⅱ 小松ひとみ（P.6、23） 藤田孝介（P.24、27）

『邂逅の森』

秋田マタギに学ぶ
自然との共生



マタギとは、 神聖なる領域へ 踏み込む者

「マタギ」とは、東北地方、特に秋田の山間で、クマやシカなどの狩猟を生業の一つとした人々をいう。彼らは農業や山仕事の傍ら、晩秋から春にかけての猟期に山に入る。狩りの間は山言葉を使い、頭領の指揮の下に掟を守り、集団で狩りを行うなど、古くから続く独特の狩猟作法を守る狩人である。

そもそも、マタギと呼ばれる者は、里にはいない。男たちは山に入って狩りをするときだけ、自身をマタギと呼んだ。マタギの名は山言葉の一つなのだ。

山に入ったら里の言葉を使ってはならない。里の言葉を使えば山が穢れ、恵みをもたらす山の神に嫌われる、とマタギたちは考えていた。里での暮らしと、山での狩猟は、別の世界の営みとして彼らには意識されていた。

「宮城の穀倉地帯で育った私は、小説家になる前から、そうした山の民の暮らしぶりに興味を持っていました」と『邂逅の森』の作者、熊谷達也さんは語る。

「東北は稲作文化の土地というイメージが強いでしょう。しかし、そうした里の暮らしと対を成すように、山には古くからの狩猟文化があったんです。小説を書くためにマタギのことを調べ、話を聞き、狩りを見ていくうちに、ひよっとしたらそちらの方が、本来の東北の姿なのではないかと思うようになりました」

その狩猟文化の中でも、平地に住む者にとって興味深く映るのが、マタギと山の神との関係だ。全国至る所に山の神はあり、それらはその

土地の守護神としての性質が強いが、マタギの信奉する山の神はいささか面ざしを異にする。

マタギにとっての山の神は、山を支配する絶対神。人など、抗うことのできない存在である。樹木も山菜も、クマやカモシカなどの獣も、山にある物は人の物ではない。山の神の持ち物だ。

入里を出て奥山に入り、マタギが狩りをするには、その絶対神の持ち物を分け与えてもらうことを意味した。だから、彼らは、先の山言葉をはじめ、さまざまな禁忌、すなわち自戒を設けることで、獣を捕る許しを山の神に乞うた。

それが古来、マタギの間に培われてきた自然観である。それは人と人が収穫物を奪い合うことなく集落を維持し、山の恵みを枯渇させず、永続的に利用するための知恵なのである。

マタギは、獲物を「捕る」とは言わない。「授かる」と言う。獲物は、山の神からの「授かり物」なのである。

そんな山の神の棲む「邂逅の森」へ、マタギたちの知恵を授かりに、出掛けてみよう。



『邂逅の森』熊谷達也

(2001年文藝春秋刊)

大正期、阿仁に生まれたマタギ・松橋富治の半生を描いた作品。美しい自然の中に生きるマタギの掟、許されぬ身分の違いの恋、又シと呼ばれるクマとの壮絶な戦いなど、波乱に満ちた物語が感動を呼び、第17回山本周五郎賞と第131回日本賞に輝いた。

山に生きる狩人

マタギ

マタギは山を駆ける狩人だが、単なるハンターではない。山や獣に関する豊富な知識と、独特の狩猟作法を伝統的に守ってきた人々でもある。マタギとは、どのような存在だったのか。その掟や作法を通して学んでみよう。

「マタギ」とは何者か

マタギとは、東北地方の山間に住み、古くからの作法や狩猟法を重んじてきた狩人集団、あるいは個人を指す。その語源は諸説があつて明らかではないが、本来は山に狩りに

右/昭和初期ごろのマタギ装束(イメージ)。汗をかいて体温が下がるのを防ぐため、厳寒期でもこのような軽装で猟をした(イラスト提供/田口洋美)



左/昭和初期のマタギたちの様子。一番左は頭領を務めた伝説の打当マタギ、鈴木辰五郎さん



入ったときに用いられる山言葉で、「人間」あるいは「成人男子」を意味する。阿仁はマタギ発祥の地といわれる。マタギの頭領(狩猟組のリーダー)は皆、その証しともいえる秘伝の巻物を受け継いできた。巻物には日光派の「山達根本之巻」、高野派の「山達由来之巻」の2種があり、阿仁マタギに多いという日光派の巻物にはこんな由来が書かれている。

実際に阿仁マタギは、地元秋田



1. 昭和17年の春の巻き狩りの様子。2. 売薬に使われた古い道具類。旅マタギをしながら、自商行商を行うマタギもいた。3. クマの胆は専用の道具で換んで干す。仕上げた胆は現在でも高値で取引される

3.11 被災者に支援を!



東日本大震災支援基金へのご協力をお願いします。募金は、すべて被災地・被災者支援に活用いたします。

現金の場合

三菱東京UFJ銀行
支店名:本店
普通口座:0492440
名義:日本財団

クレジットカードの場合

日本財団ホームページへ

日本財団 検索
03-6229-5111

日本財団
The Nippon Foundation

日本財団は、2011年4月1日から公益財団法人になりました。



頭領が受け継ぐ秘伝の巻物。マタギの由来や狩りの作法などが書き記されている。かつては猟の際に頭領が必ず山へ持って入り、小屋の中に設けた神座に祀り、祈りを捧げたものだという。現在でも、頭領を務めるマタギの家には大切に保管されている

の山で狩りをする「里マタギ」ばかりではなく、他領の山々を歩いて狩りをする「旅マタギ」も行った。江戸時代後期、越後生まれの文人、鈴木牧之が著した『秋山記行』には、秋田マタギに関する記述がある。牧之は新潟県と長野県の県境にある秋山郷で、秋田から来たというマタギと出会い、その話を記録している。時代が下り、明治、大正になると、毛皮の需要が爆発的に増えたことや、鉄道などの交通機関が発達したことにより、この旅マタギが盛んに行われた。阿仁マタギの行動範囲は、北は北海道や樺太、南は京都や奈良にまで達している。そして、その卓抜した狩猟の技術を、各地に伝え残している。

マタギの狩猟は主に冬期、晩秋か



左/今年の春に行われた、打当での巻き狩りの様子
下/マタギの主な獲物となる、ツキノワグマ。体長は約1.5メートル。平均体重はオスが70キログラム、メスが60キログラムといわれる



ら春先にかけて行われ、わずかな耕作地しか得られない山間集落の人々の副業となってきた。しかし、旅マタギが隆盛した明治・大正期、漢方薬として使われるクマの胆や毛皮による収入は、かなり大きなものになった。このためマタギは狩猟のみを生業としているように見られがちだが、狩猟が副業であることは、今も昔も変わりはない。阿仁には、打当、比立内、根子という古い歴史を持つマタギ集落がある。現在、マタギの数は合わせて40人ほどであるという。鳥獣保護の規制も厳しくなり、昔のように多彩な獲物を捕る猟はなくなつた。高齢者が多いが、中には30代の若いマタギもいる。今も昔ながらの風習を色濃く残す猟が行われているのだ。

ランチパックは、月刊です。



毎月新しいおいしさをお届けしているランチパック。今回は軽井沢産キャベツのシャキシャキした食感が楽しめるメンチカツをサンドしました。1ヶ月間の限定商品ですので、今月はこのランチパックをバクバクしてくださいね!

ケータイするランチ ランチパック

モバイルサイト: <http://yamazakipan.net/>
PCサイト: www.yamazakipan.co.jp/lunch-p/
※販売店では、携帯電話の電源をおかけください。
また、それ以外の場所ではマナーキーに切り替え、通話にはご注意ください。
このランチパックの広告コピーは「第48回宣伝会議賞」にて優秀作品に選ばれたコピーです。



古くからの伝統を重んじてきたマタギには、狩猟法のルールだけでなく、さまざまな禁忌がある。出猟前は一定期間、夫婦でも寝屋を分ける。山の神が嫉妬深い女神なので、妬まれるのを避けるためだといわれる。

マタギの しきたり



オコゼの干物は、巻物と共に携えていた。山の神への供物。嫉妬深い山の神は、自分よりも醜いオコゼを見て喜ぶのだという

からだという。ほかにも、細かい決め事が実に多い。これらの禁忌は、山の神の領分に入り、獲物を分けてもらうための一定の手續きともいえる。山の支配者に嫌われては、獲物を得られないどころか無事に里に戻れないかもしれない。だから、マタギは厳然とこれを守る。

また、仕留めたクマを解体するからだといい。ほかにも、細かい決め事が実に多い。これらの禁忌は、山の神の領分に入り、獲物を分けてもらうための一定の手續きともいえる。山の支配者に嫌われては、獲物を得られないどころか無事に里に戻れないかもしれない。だから、マタギは厳然とこれを守る。



左/「打当温泉 マタギの湯」入り口付近にある、マタギ小屋の再現。かつては狩りの季節の前に猟場に簡素な小屋を建て、狩りの際に寝泊まりした。右/古くは槍、明治から昭和にかけては村田銃、現在はライフルと、マタギの武器も時代とともに進化している

マタギの 狩猟法



巻き狩り (概念図)

- ショリ頭領 (ムカイマツテ)
- フッパ 射手
- ヨモ 勢子

尾根に配置された勢子は、斜面を横に渡りながら、上流にいる射手の方へクマを追っていき、射手はクマが逃げるであろう場所でそれぞれ待ち受ける。頭領が務める場合が多いムカイマツテは、猟場全体が見渡せる場所に立ち、クマの動きと勢子の動きを見ながら指示を出す



マタギの猟では、猟場に入ったクマを追い込む「巻き狩り」が知られる。クマの巻き狩りは、4月下旬から5月にかけて行われる。冬眠明けのクマを追う猟だ。5人から、多いときは30人もマタギが、猟場を取り巻くようにして獲物を追うので、巻き狩りの名がある。

猟場では、頭領がマタギ衆を、射手(マツッパともいう)と勢子(追っ手)に分ける。沢から尾根に向かってクマを追っていき、尾根に配し、勢子は「ホー、ホー」などと大声を上げて猟場にいるクマを射手のいる方へ追っていき。

「サゲマキ」はこの逆で、尾根から沢へと追い込む巻き方だ。頭領は、

クマの毛皮は衣類や敷物に使われた。「打当温泉 マタギの湯」併設の「マタギ資料館」にはこうした貴重な資料が展示されている

立又溪谷の「マタギ」を往復して30分ほど歩くと現れるのは階段状に流れ落ちる「二ノ滝」



沢を登り滝を望み、マタギの駆けるブナの森へ

山を駆ける狩人たち

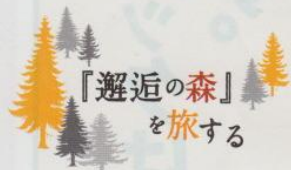
ブナが実を付けている。小粒だが、ブナはたくさんの実を付ける。「クマの好物です。冬眠前のクマは、ブナの実をかき集めて食べますよ。今年はブナの実、豊作のようだな」と鈴木英雄さんが言う。

鈴木さんは今年64歳。打当、根子、比立内とあるマタギ集落のうち、打当に暮らすマタギである。マタギは世襲ではないが、鈴木家は代々がマタギの家だ。祖父の辰五郎さんは頭領を務めた人で「空気投げの辰」という異名を持っていたという。その祖父に付いて15歳のときから山に入った。父の金作さんもマタギだった。

その鈴木さんと今、猟場を眺めている。場所は、阿仁から玉川温泉方面へ向かう市道の途中に架かる「ムキ橋」の上。北に広がる山並みの中に「両様」「水尻」と彼らが呼ぶ2つの猟場がある。どちらも屹立した山容を持ち、下がすり鉢状の谷になっている。

「山の尾根筋に何人かの射手を置いて、下から4、5人の勢子でクマを追いかけていくんです」

春、冬眠明けのクマを捕る巻き



「奥阿仁」山の神の棲む森を歩く

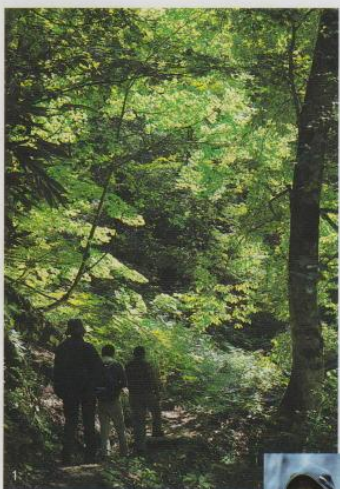
森を歩く

奥阿仁はマタギの聖地である。

秋には息をのむほど美しく色づく落葉広葉樹の森は、狩人たちの駆け回る猟場でもあるのだ。

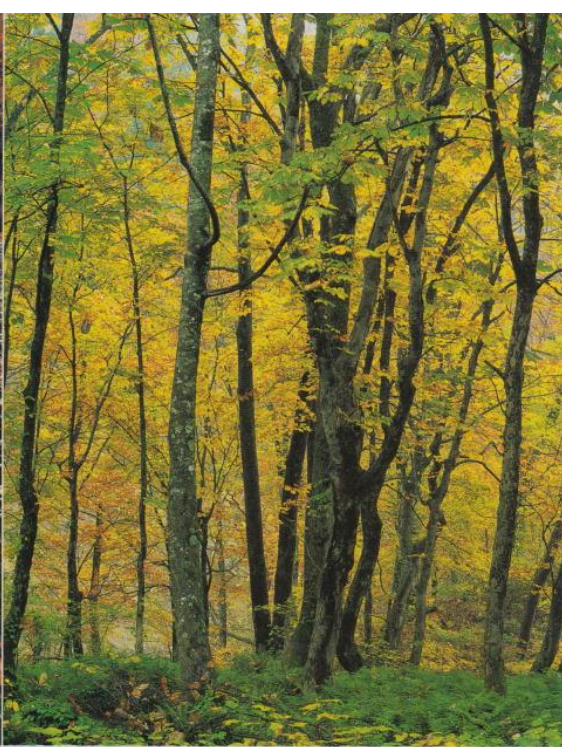
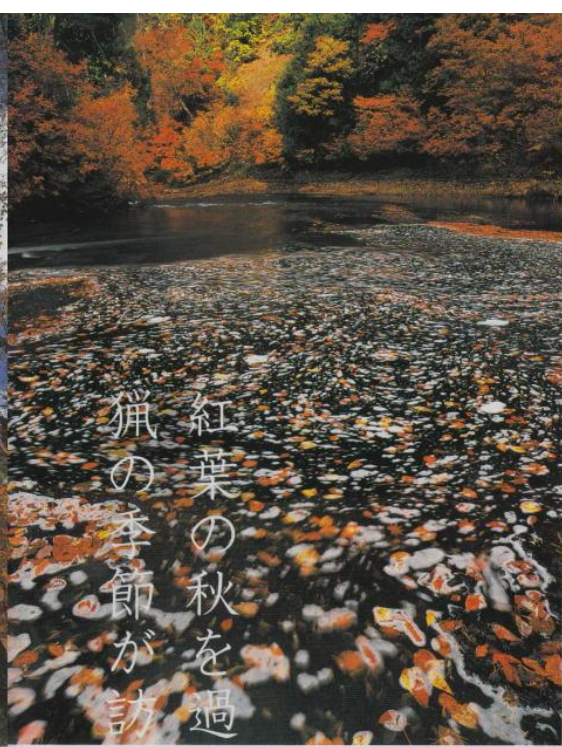
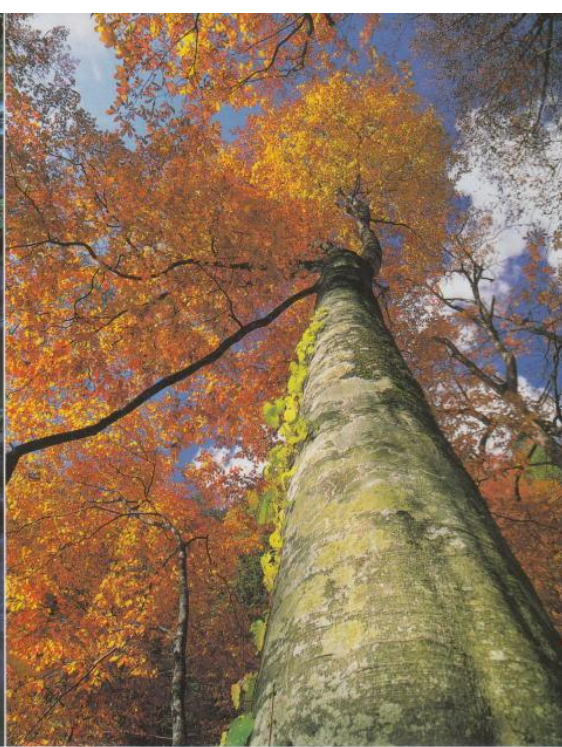
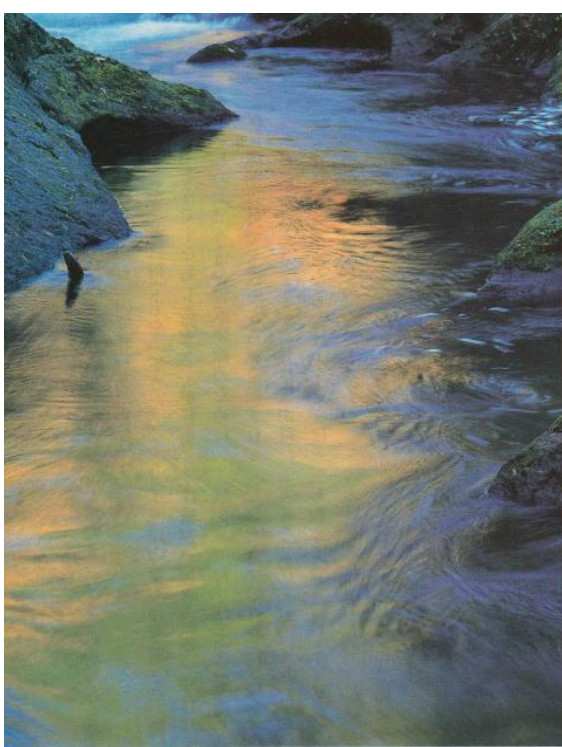
彼らが受け継いできた知恵を授かりに、山の神の棲む森へ。

マタギの鈴木英雄さん、民俗学者の田口洋美さんと共に歩いた。



1. うっそうとした森へ分け入る
2. 現在も仕事の傍ら猟を行う鈴木英雄さん。祖父の辰五郎さんは、襲ってきたクマから身をかわして谷底に投げ落としたという武勇伝を持つ伝説のマタギだった
3. 民俗学者の田口洋美さんは、毎年全国のマタギを集めたマタギサミットを主催。主な著書に「マタギ 森と狩人の記録」「マタギを追う旅 ブナ林の狩りと生活」(共に慶友社) など





左/穏やかに流れる沢。巻き狩りのときには、こうした沢沿いを鈴木のマタギが駆けていく。右/射手は巨木を背にし、息を潜めて獲物待

左/落葉で色づく水面はこの季節にしか見られない光景の一つ。右/秋の奥阿仁には、見事な黄金色に輝くブナの原生林が広がる

紅葉の秋を過ぎればやがて 猟の季節が訪れる

「邂逅の森」
を旅する

で、水の浸食でできた低い滝と、丸い滝つぼが段を成して続いている。お釜のような滝つぼには、イワナが優雅に泳いでいた。

山肌には、桃洞杉の林が広がっている。通常の秋田杉は海拔700メートル以下に分布するが、桃洞杉は800メートルから950メートルの高地に生育する。ここでは広大な範囲にわたって天然林が形成されていることから、国の天然記念物にも指定されている。

沢を登りながら、鈴木さんと田口さんからマタギの話聞く。

「マタギは狩猟だけをしていただけではないです。魚も捕るし、きこりもやる。そもそもが副業なんです。今は別の仕事の傍ら猟をしてる人ばかりです」鈴木さん。

「マタギ集落も、生活の基本は農業です。しかし、山間では耕作地が少ないので、いろいろなことをして食料や収入を得なければならなかった。それは今も昔も基本的に同じです」と、後を引き取って田口さんが解説してくれる。

マタギ集落の一年は、春の焼き畑、田植えに始まり、山で山菜を探り、夏は川漁をし、秋はキノコ類を採る。その合間に木を切り出す柚

たもの。だから「誰が何頭捕った」という自慢はしない。捕った獲物は皆で均等に分ける。それを「マタギ勘定」というのだと、鈴木さんは教えてくれた。

立又溪谷の沢を登る

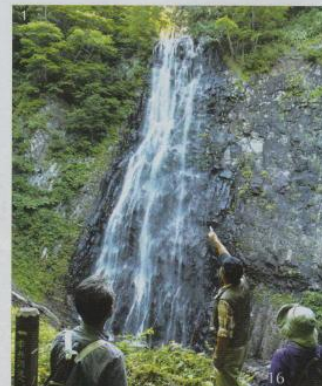
猟場を見た後、打当川の上流、立又溪谷の一ノ滝を見に行った。阿仁のシンボル、森吉山の周囲には、山から湧き出す水が多くの沢となつて流れ下り、さまざまな溪谷美を見せてくれる。

落差約38メートルの一ノ滝は、その先にある二ノ滝、幸兵衛滝、中ノ又溪谷の安の滝などと並び、阿仁を代表する名勝に数えられている。

その後、東北芸術工科大学教授の田口洋美さんと合流し、清冽な水の流れる中ノ又溪谷の沢歩きを楽しんだ。田口さんは、民俗学者でマタギ研究の第一人者でもある。沢は、岩盤を水が削り込んだ谷

4. 大きなフキの葉は沢水を飲むときのコップ代わり。これも小さな山の知恵だ。5. クマにかじられた案内柱。「クマにとっては目障りな障害物なのかもしれません」と田口さんは言う。6. 木の根元に開いた穴。「小さいクマが入るのいい大きさだ。ここで冬眠してたかもしれない」と鈴木さん

1. 優美に流れる「一ノ滝」。2. 鈴木さんの先導で沢沿いを歩く。猟で鍛えた山の達人の足取りは軽い。3. 猟場を一望する「ムキ橋」からの景色





1.ぬかるみに残ったクマの足跡。爪の鋭さがよく分かる。2.鋭く残るクマの爪痕。3.クマが木に登り、枝ごと折り取って実を食べた後に残る樹状の跡。クマ糞と呼ばれる

仕事もする。そうしなければ、生きていけないから、山で暮らすために必要なことは何でもやってきた。「そうすなわ」と鈴木さんが昔をしのぶ「今は、吉獣駆除のために猟期以外でも役所から猟を頼まれることはありますが、昔は雪が降りだすころにならねば、マタギは動かんものでした」

マタギは年中、猟をしているように思われがちだが、それは誤解だと鈴木さん。「そんなことをしたら、山から獣がいなくなってしまう」と笑った。

森では常に見られている

沢を登り、金兵衛滝の辺りまで来た。谷に少し影が差し始めている。その暗がりの中で、岩盤を伝い落ちる沢水が、絹を束ねたように白く輝いている。そこから少し奥へ入った所で「ほれ、クマの通っ



た跡だ」と鈴木さんが傍らを指さした。河岸の草がなぎ倒され、踏み分け道ができていた。ザワリと鳥肌が立った。今まで話で聞くだけだったクマの存在が、にわかに関実味を帯びて迫ってきた。その後数カ所で、同じようなクマの踏み跡を見た。

「クマは、今もどこかで俺たちのごと見てるに違いない。こういう森の奥さんるときは、油断しちゃ駄目なす。できればその土地をよく知ってる人と一緒に入ってほしいすな」と鈴木さんは言う。

クマが最も恐れる生き物は人間だ。話し声や物音が聞こえれば、警戒心の強い彼らは一目散に逃げ出す。しかし、森の中で鉢合わせしたら、彼らは身を守るために襲い掛かってくる。彼らも生きるために必死なのだ。

落葉広葉樹の広がるこの森は、マタギたちが言うように山の神の支配する国、多様な生き物の生活領域だ。そこに踏み入る私たちは、彼らにじっと見られている。そのことを、まずわきまをしなければならぬ。これは、マタギの教えの基本中の基本だ。

山への畏怖と感謝は 生きるための知恵でもある

「程を知る」という生活

「私たちは、クマにずっとこの山にいてほしいのす」と、鈴木さんは祈るように言う。

今は、鳥獣保護の規制により、狩猟の対象となる動物は限られている。しかし、かつてのマタギは、さまざまな動物を捕った。

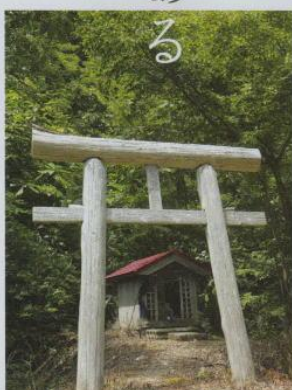
クマのほかには、カモシカ、シカ、ウサギ、タヌキ、アナグマ、テン、バンドリ(ムササビ)、ヤマドリにキジ……。しかし、必要以上に鳥獣を狩ることはしない。

「そういう生き物たちのおかげで、私たちは、ずっとこの土地で生きてこられたのですから」

マタギが培ってきた知恵には、現代の私たちこそ、学ぶべきことが多いと田口さんは言う。

「大切なのは『程を知る』ということ。マタギは、ほどほどの距離を保って自然と付き合ひ、持続可能な利用をしてきたのです」

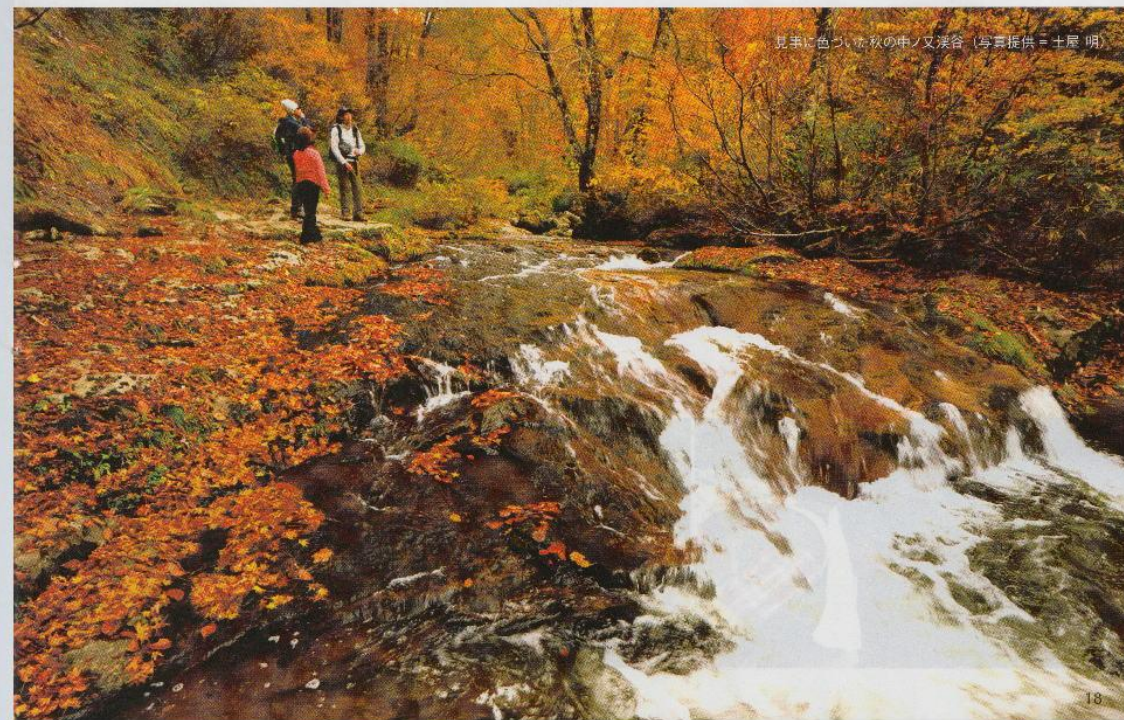
生活のための資源を使い尽くすことなく、自然の循環と再生を重んじる生き方。それがマタギの生活であり、自然観だ。



空の色と風から天候の変化を知り、獣の足跡からその行方を探る。山にある木々を柔軟に使いこなす技を持ち、何が安全で何が危険かを自分で判断する力を持つ。

それは山で生き抜くために、おびただしく長い歴史の中で伝承されてきた経験の蓄積。それこそが生きる力だ。現代の私たちは、あらためてそのことを、思い返してみる必要がある。

猟の前には成功と無事を祈り、後には感謝を捧げるマタギ神社。猟場に入る手前にひっそりとたたずんでいる



紅葉に色づく、秋の中ノ又溪谷 (写真提供=土屋 明)

教員への夢を叶える 大学院!

【教育職員免許取得プログラム】

実力を兼ね備えた 教員に!

【プロフェッショナルな教育実践】

教員への夢を大学院で実現! 現職教員はさらにステップアップ!

修士課程
学校教育専攻 教科・領域教育専攻

教育職員免許取得プログラム
教員養成系以外の大学・学部で学んだ学生や社会人等の方が、大学院2年分の授業料で3年間、大学院及び学部で学び、修士の学位取得と教育職員免許状の取得を可能にするプログラムがあります。

専門職学位課程(教職大学院)
教育実践高度化専攻

スーパー教師を養成
刻々と変わる教育現場の状況を即時に判断し、適切に対応しながら教育実践を展開していく【**即応力**】。教育現場の教育課題を解決する【**臨床力**】。学校種や専門、地域や年齢の異なる人々が実践を共有しながら【**協働力**】を育成します。

大学院学生募集
平成24年度 上越教育大学大学院 学校教育研究科

中期募集
出願期間 平成23年10月18日(火)~10月27日(木)
試験日 平成23年11月26日(土)

後期募集
出願期間 平成24年1月30日(月)~2月7日(火)
試験日 平成24年3月2日(金)
※詳しくは学生募集要項をご覧ください。

国立大学法人 **上越教育大学**
http://www.juen.ac.jp/
〒943-8512 新潟県上越市山屋敷町1番地
入試課 TEL025-521-3293
上越教育大学

小説『邂逅の森』の世界を訪ねて
厳しく美しい冬の獵場へ

紅葉に色づく秋が過ぎ、
厳しい冬の訪れとともに、
マタギたちにとっての恵みの季節がやって来る。
見渡す限り雪に覆い尽くされる冬の獵場でこそ、
狩人たちの「勝負」は繰り広げられるのだ。

ここまで厳しい冬山はマタギだけのものだ。

山で生き抜く力があるかに長けた獣をも、この時だけは、人間の意志が淺瀆する。
毛皮を持たず、生身のままで一日たりとも生き延びられない存在だからこそ、
裏を返せば為せる業。

動物としての己の弱さを骨の髄まで知っているマタギたちが、
唯一、獣の王者になれる瞬間でもある。

(邂逅の森より)

角館を出発した列車は、無人駅をたどりながらのどかな田園地帯を走る。遠くに見えていた山々が次第に近づいて、5つ目の松葉駅を過ぎればそこはもう深い森の中だ。邂逅の森の舞台となった山懐へ、森の奥へと鉄路は延びる。

秋田内陸縦貫鉄道は、秋田新幹線の角館駅と奥羽本線の鷹ノ巣（秋田内陸縦貫鉄道では鷹巣）駅を結ぶ91.2キロのローカル線だ。山深い地とはいえ、阿仁にはかつて金や銀、銅を産出した鉱山があった。大正時代に「鷹角線」として計画が立てられたのは、それだけ鉱山が繁え、人の往来も活発だったからだろう。昭和に入って角館側と鷹ノ巣側から順次敷設されていったが、実は最後の松葉比立内駅間が開通して全線がつながったのは平成になってからのことだった。さすがに山間を走るこの区間にはトンネルが多く、戸沢駅を出ると列車は、長さ5697メートルもある十二段トンネルにすべり込む。長い長い闇を抜ければ、程なく阿仁マタギ駅だ。邂逅の森の主人公、松橋富治が生まれ育ったマタギの里、打当はここから2キロほどの場所にある。

秋田内陸縦貫鉄道で行く マタギの里への旅

山深いマタギの里へは、大自然の中をのんびりと走るローカル線での旅が楽しい。

沿線には、山の恵みをたっぷり受けたこの里ならではの楽しみが待っている。

秋田内陸縦貫鉄道に乗って、秋の山里を満喫する旅に出てみよう。



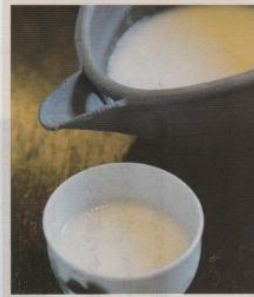
言葉が通じないクマに、富治は呼びかけようとした。口を開いたものの、声が出ないので、胸の中でコブグマに向かって喋った。

——俺はおめえの仲間をさんざん殺めてきたからの。かまわねえがら俺を喰え。俺を喰って力ばつけて生きながらえろ。この山のヌシとして、いつまでも生き続けろ。したら、俺も本望だべしや……。

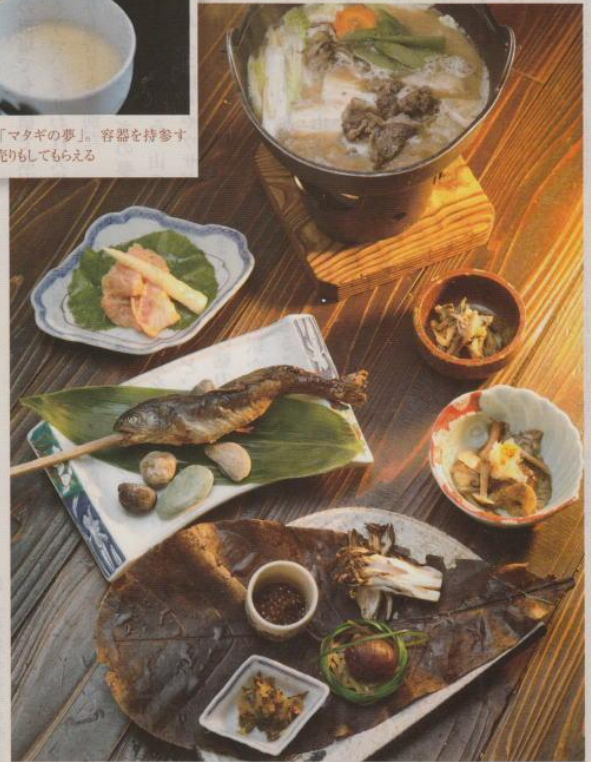
(「邂逅の森」より)

○打当温泉 マタギの湯

〒北秋田市阿仁打当仙北渡道上ミ67
 秋田内陸縦貫鉄道「阿仁マタギ駅」
 から車で約5分
 ☎0186・84・2612



どぶろく「マタギの夢」。容器を持参すれば量り売りもしてもらえる



マタギの里の味覚を存分に楽しめる「じゃんご料理」(要予約)の一部。手前から時計回りに、前菜4種はマイタケ、栗の渋皮煮、なっつ、イワナの卵。イワナの串焼き、マスのなまや、クマ鍋、トビタケのニンニクあえ、サモダシのお返し添え
 ※食事のみの利用可。メニューは季節によって異なります。クマ鍋は別注文となります

マタギの里の食を味わう
 小さな集落の傍らに立つのが、「打当温泉 マタギの湯」。館内には「マタギ資料館」も併設されており、マタギ文化を知るには格好の宿だ。しかもここでは1日3組に限り、マタギの里の食を盛り込んだ「じゃんご料理」を供している。じゃんごとは土地の言葉で田舎のこと、で、生魚をにんにく味噌であえた「なまや」、味噌漬けの野菜やキノコなどを細かく刻んで混ぜた「なっつ」など、阿仁ならではの食が次々と登場する。
 マタギの食の代表格、「クマ鍋」は、意外や意外、クセやにおいがほとんどなく何ともいえないおいしさだ。脂身に甘みがあって、かむほどに滋味が広がる。また、秋には欠かせない山の幸、阿仁のキ

東日本大震災復興支援
 KARUZAWA OHGA HALL
 軽井沢大賀ホール
 2011-2012 Autumn New Year

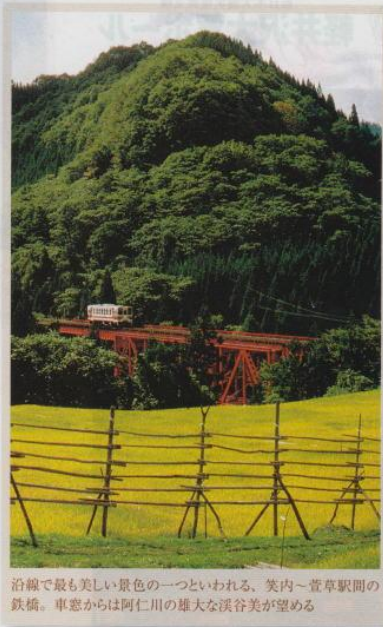
伍代夏子コンサート
 10月15日(日)
 [昼の部]13:00開演
 [夜の部]16:30開演
 曲目 辰利用、雪中花、金木犀、霧笛橋 他
 ヲケスト:黒川真一郎
 1階席:6,500円 2階席:5,000円 3階席:3,500円

イ・ムジチ合奏団
 結成60年ツアール
 10月22日(土)
 15:00開演
 モーツァルト:「アイネ・クライネ・ナハトムジーク」
 モーツァルト:交響曲第40番 ヴィヴァルディ:「四季」
 S(前・2階):売切れ A:8,000円 後席最少 B:売切れ
 C(2階立見席):4,000円 W(2階合席席):売切れ

鈴木雅明指揮 パッパ・コレギウム・ジャパン
 12月25日(日) ハンデル
 15:00開演
 「メサイア」(全曲)
 シンファン:マリム・アララン
 ソプラノ:カレン・オナー、クリント・ファン・デア・アレン
 テノール:ジェムズ・テイラー、バリス・ステファン・マクワッド
 S(前・2階):7,500円 A:7,000円 B:5,500円
 C(2階立見席):3,500円 W(2階合席席):4,000円
 Tribute to Mr. Norio Ohga

金聖響 指揮 ニューイヤー・コンサート
 シエナ・ウインド・オーケストラ
 2012年1月2日(月・休)
 14:00開演
 ハンスタイン:「キャンティード」序曲
 リード:アルメニア・ダンス Part1、クレンメラ・メロデー 他
 S(前・2階):5,500円 A:5,000円 B:4,000円
 C(2階立見席):2,500円 W(2階合席席):3,000円

チケット好評発売中!
 軽井沢大賀ホール チケットサービス
 ☎0267-31-5555
 軽井沢大賀ホール
 1月1日(日) 14:00開演
 1月2日(月) 14:00開演
 1月3日(火) 14:00開演
 1月4日(水) 14:00開演
 1月5日(木) 14:00開演
 1月6日(金) 14:00開演
 1月7日(土) 14:00開演
 1月8日(日) 14:00開演
 1月9日(月) 14:00開演
 1月10日(火) 14:00開演
 1月11日(水) 14:00開演
 1月12日(木) 14:00開演
 1月13日(金) 14:00開演
 1月14日(土) 14:00開演
 1月15日(日) 14:00開演
 1月16日(月) 14:00開演
 1月17日(火) 14:00開演
 1月18日(水) 14:00開演
 1月19日(木) 14:00開演
 1月20日(金) 14:00開演
 1月21日(土) 14:00開演
 1月22日(日) 14:00開演
 1月23日(月) 14:00開演
 1月24日(火) 14:00開演
 1月25日(水) 14:00開演
 1月26日(木) 14:00開演
 1月27日(金) 14:00開演
 1月28日(土) 14:00開演
 1月29日(日) 14:00開演
 1月30日(月) 14:00開演
 1月31日(火) 14:00開演



沿線で最も美しい景色の一つといわれる、笑内~葦草駅間の鉄橋。車窓からは阿仁川の雄大な渓谷美が望める

ノコは秋田の市場でも高値で取引されているようで、とりわけ天然ものは菌触りも香りも格別だ。特製のどぶろく「マタギの夢」と共に料理を味わいながら、山の食材や料理、キノコ採りやウサギ狩り、マタギの掟や山の神様の話……。給仕と説明役を務めるスタッフとの会話も弾み、食の向こうに自然と共存してきた山里の暮らしがしのばれる。

列車を降り大自然に浸る

阿仁マタギ駅から、鉾山全盛期にはその中心地として栄えた阿仁合駅、さらにその先の阿仁前田駅へ。この辺りも引き続き山深いエリアだ。時に鉄橋を渡り、車窓から阿仁川の流れを右に左に見下ろして、列車はダイナミックな自然の中を走る。車窓からも紅葉真っ盛り、の自然美を存分に楽しめるが、列車を降りて足を延ばせば、森吉山や太平湖など、森と山、水に恵まれた阿仁の魅力は尽きない。

阿仁前田駅から、人家もまれな道を車で走ること約25分の山懐には、「軒宿」**「楠温泉旅館」**が静かに湯煙を上げている。ご主人は狐や釣りの名人で、山菜やキノコ採りもお手のもの。多彩な山菜料理、クマ鍋、イワナの塩焼きなど料理の素材の大半が自ら調達してきた山の恵みで、味には定評がある。加えて自慢の温泉は、加熱も加水もしない源泉掛け流し。野趣に富

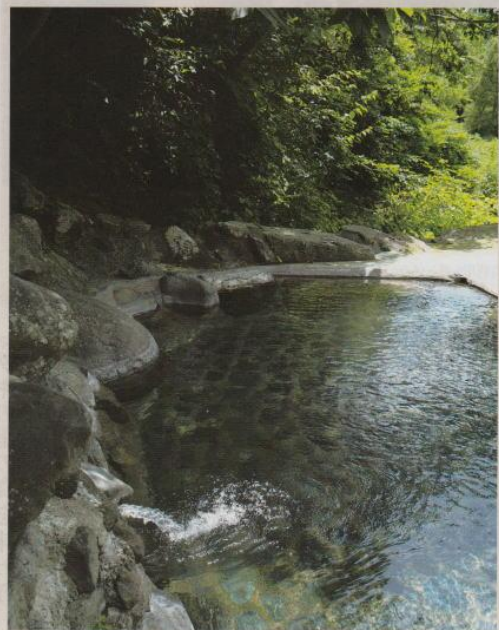
んだ露天風呂で澄んだ湯に浸れば、山と森に抱かれている心地がする。
 阿仁前田駅に戻りさらに先へ、車窓に田園風景が戻ってくれば、秋田内陸縦貫鉄道の旅もそろそろ終盤だ。多くのマタギたちが山々を渡り、鉾山が人を集めた昔を慈しむかのように、列車はゆっくりと阿仁の自然の只中を行く。走行音がひととき耳に懐かしく響くのは、「邂逅の森」の物語の余韻だろうか――。

◎楠温泉旅館

〒北秋田市森吉字湯ノ沢7
 秋田内陸縦貫鉄道
 「阿仁前田駅」から車で約25分
 ☎0186・76・2311



ご主人自慢の山菜料理6品。秋になれば天然キノコのおいしさも格別



野趣あふれる楠温泉旅館の混浴露天風呂。湯は享保2(1717)年に発見され、江戸時代後期の紀行文、菅江真澄も訪れたという